

地方自治ここにあり 首長インタビュー

5つのことを「実感できる」まちづくりをめざして



日裏勝己町長

印南町長 日裏勝己さん

少子化、高齢化、地域経済を支える第一次産業の危機の中で、地方創生が取り組まれている。5つの「実感できる」まちづくりとはどういうものか。町政2期目にはいった印南町の日裏勝己町長にお話を伺いしました。聞き手は本研究所の中島正博常任理事です。

中島：少し経ちましたが、2期目の御当選おめでとうございます。2期目の抱負といいますが、1期目のどこを引き継いで発展させるのか、というあたりをまずお聞かせください。
町長：どうもありがとうございます。2期目が大きく変わるということではないと思います。やはり継続していくことが大切です。

避難路の整備と庁舎の免震構造化で強靱で安全・安心を実感できる

町長：実は私が住んでいるところは、印南町のなかでも標高200〜300メートルの山の方なんです。印南町は東西に20キロ程あり、役場のある西部は海に面していますが、東部は山間地です。最初の町長選挙に出させてもらったときですけれども、海岸の方にあまり来たことがありませんでした。選挙になって、いろいろ御挨拶に回ったりしたときに、思っていたよりも家と家とが密集していて道が狭い。津波の被害が大きかった東日本大震災の後でしたから、住民の皆さんの声を聞くうちに、地震が起こり津波が来て逃げるときにどうするかということ、やはり避難する道を最優先に考え

て、住民の命を守る、1人の犠牲者も出さないということを目指し、4年間かけてだいたい避難路は整備しました。これは2期目も継続していきます。
中島：整備というのは具体的にどんな感じでしょうか。
町長：はい。1つは従来、印南小学校の児童はグラウンドをまわって、10分程かけて高台へ上がるようなルートになっていたのですが、地権者の方が協力していただけということで、グラウンドを出たらすぐに幅員5メートルの階段で高台へ上げられるようになり、1、2分程で上がれる避難路を整備することができました。
中島：津波の場合、5分は大切ですね。
町長：そうなんですよ。元々のルートよりかなり短縮することができましたので、保護者の方からも喜ばれています。
それから、住宅が密集している所の空き家を撤去して、そこに新しい道をつけています。ですから、真つすぐな道ではなくて、空き

目次

地方自治ここにあり 首長インタビュー

印南町長 日裏勝己さん……1

大阪から鞆刈(紀の川市へ)

陶芸家として歩んでくれた地域に感謝

紀の川市上鞆刈 田中利三さん……5

わかやま住民と自治

発行/和歌山県地域・自治体問題研究所
和歌山市湊通丁南1丁目1-3 名城ビル3F
TEL・FAX 073-425-6459
jichiken@crux.ocn.ne.jp 2016年5月号



建設中の庁舎と完成予想パース

家を追いかけて直角直角に曲がりながらの避難道になっています。こうした防災対策は行政だけでできるものではありません。地域住民の理解と協力があってこそ、実現できるものです。

就任される前からの計画です。町長：はい。計画は以前からありましたが、住民代表の方々の検討委員会や役員職員で構成するプロジェクトチーム等の意見を取り入れながら、建設計画を練り直し、場所も変更して現在建設中です。今年度の完成で、平成29年4月から新庁舎での業務開始です。大規模災害にいち早く対応できるように免震構造にしています。

住宅をなんとかして、住みたい住み続けたいを実現できる

中島：では、今年3月に策定されました、「まち・ひと・しごと

創生印南町総合戦略」の内容についても伺いしたいと思います。町長：はい。地方創生、印南創生というこ

とですけれども、人口減少は全国的に同じことだと思えます。現在8560人の人口が、このまま行くと2060年には3700人程度になってしまうというところで6000人という目標は正直希望的な部分もあるのですが、そこにどのようなして持っていくかということだと思えます。そのため住民の皆さまと知恵を出して印南創生を図ってきたいと考えています。

人口減少にブレーキをかけるためには、とにかく印南町に住んでもらう、住み続けたいということを実感できる町づくりが大切だろうと。これは町政全体の目標として、今年度から

始まる第5次長期総合計画（後期計画）でも掲げた訳ですが、5つのことを実感できるまちをめざします。「住みたい、住み続けたい」、「子育て・教育の充実」、「強靱で安心・安全」、「思いやりと安らぎ」、「地域産業が輝き賑わい」という5つをあげさせてもらい、この5つを実感できる町づくりをしていくという取り

組みです。中島：まずは住むところから。町長：はい。「住みたい、住み続けたい」ということについては、「住む家ないですか?」「アパートないですか?」という問い合わせは多いんですけれども、なかなか住宅の環境がうまく整っていません。そこで、住宅・宅地整備計画を進めていこうと考えています。

町有地にするのか、民間の力でやってもらうのかいろいろ方法はあると思うのですが、そのあたりの調査も行って、進めていくようにしています。

中島：空き家の活用ではないのですか。町長：空き家バンクという取り組みも行っていますが、古い家が多いですね。それと普段は空き家ですが、お盆と正月に帰ってくる、仏壇を置いているからなど、空き家の利活用については課題もあります。中島：住むところは理解できました。次に重視することについて子育て・教育ということでしょうか。

10年一貫教育で「子育て・教育の充実」を実現できる

町長：はい。教育の充実については、10年間を義務教育にしようという考えなんです。小学校の6年間、中学校の3年間に、こども園が1つ町内にあるんですが、その5歳児の保育料を無料にする。

中島：5歳児の無料化とはそういうことだったのですね。こども園の方は希望は多いのですか。町長：はい。多いですね。現在、待機児童は1人もいないのですが、こども園には229人の園児が在籍しています。

中島：10年一貫で教育に配慮していく。町長：現在の印南町は、小学校4校、中学校4校あり、こども園が1つあります。特に園小連携、小中連携を強化しながら、子育て・教育を系統的に進めるねらいがあります。

中島：10年かけて、子どもの時代から印南町に育つて



町長室から見える「かえる橋」

良かったということになるんですよ。
町長：そうなんです。印南町には高校もないし大学もないので、皆さん中学校卒業後、町外で勉強されますけれども、そのまま就職して町外に行ってしまうことが多いんです。町外でしっかり勉強されて、しっかりと大人になられて印南町に帰ってきていただきたい。そういう思いです。
帰ってきて、印南町で住んでもらう。町内で働かなくても、御坊や田辺で働くこともできる。高速で走れ

ばインターからインターまで15分程で行けます。
中島：次の「強靱で安心・安全」というのは、最初にお伺いしました。4番目に掲げられているのは「思いやりと安らぎ」で健康福祉、高齢者対策ですね。
町長：これも1期目の継続ですが、やはり、高齢者の方が楽しく印南町で生活してもらえると、安心して生活してもらえると、これは大切なことです。
高齢者が住み慣れた家庭や地域で健康で生きがいを持って暮らし続けられるよう、地域見守り活動等各種政策の充実を図りたいと考えています。

**農業を中心に、
地域産業が輝き
賑わいを実感できる**

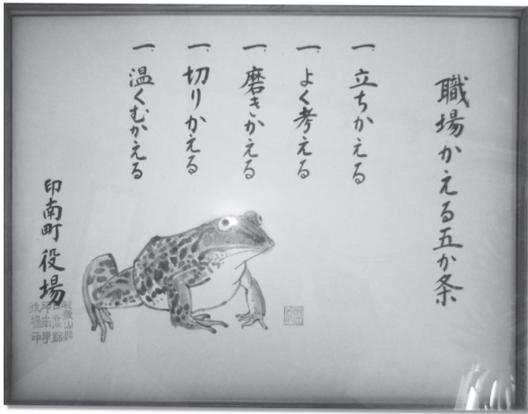
中島：地域産業、とりわけ農業になるうかと思えますが、どういった方向になりますか。
町長：当町の農業は、JAの売り上げ（平成27年度）で見ると、全体が27億3300万円。ミニトマトがトップで8億3500万円、豆類が5億3900万円、スイカが2億5000万円。これに花は7億1300万円。
中島：和歌山県南部は、梅やみかんのイメージですが、印南町では高速からもハウスが見えて、農業が盛んだという感じがしております。
町長：そうですね。ミニトマトはやはりJAさんと生産部会の方がかなり努力をされて、自分たちでも品質を落とさないでブランドをずっと保とうという努力が市場で評価されています。
今では、印南町のミニトマトといえば品物を見なくても買っていただけのようにです。

中島：信用ですからね。
町長：ただですね、当町も今は、ミニトマトであったりスイカであったり花であったりと、このような元気なうちに次の策を考えておいたほうが良いのではないかと考えています。
中島：後継者の方はいらっしやるのですか。
町長：若い方も残られてい

ますけれど、やはり差がありますね。例えば、ミニトマトでいうと、少し中途半端な作り方をすれば、それだけの甘さ、糖度が出ない。そこをきっちり行つて、しっかりと利益を伸ばしている農家さんは、次の後継者にうまくリレーされていますね。
中島：高速道路に印南サービシアreaがあり、そこに野菜の直売所がありにぎわっているようですね。
町長：そうですね。直売所です。自分たちで値段をつけて、今年何が売れたから、来年はあれをつくらうなど、自分たちで工夫しながらつくっているようです。今までの農業ですと、消費者の顔がみえないところで市場へ野菜を送っていました。やはり、本当は消費者の方がどのようなものを欲しがっているのか、どのような形にすれば売れやすいのかを研究することが大切です。また、以前白浜へ行くと



インタビューに答える町長



町長室にかかる「職場かえる五か条」

中島：職員への期待、若手

職員へのメッセージ

ニケーションがとれているようになによりです。移住については、地域とうまくなじんでもらえるとういうことも大切です。中島：そうですね。役場としては移住者窓口みたいなものもあるのですね。町長：はい。昨年、和歌山県内の市町村で構成する「移住推進市町村」に加入し、県が行う移住・定住に関する事業の助成を受けることができるようになりました。

住民自らが

地域づくりをになう

職員あるいは中堅職員も含めてですが、どういうふうな職員のあり方を求められていらつしやるかというのを聞かせてください。町長：今の職員構成では、42歳から48歳の間の職員がいないんです。そこで、職位より頑張っている職員や能力のある職員をできるだけ昇格させる。やる気のある職員は初めての課へ移動しても、すぐ覚えて能力を発揮しますよね。やる気だと思えます。

中島：印南町は平成の大合併では、単独を選ばれていますが、昭和の合併で何町が一緒になったのですか。町長：5町村です。役場のあるあたりは明治から印南町でしたが、印南と稲原村に、そして真妻、切目川、切目が小さな合併をしたうえで、昭和32年に現在の印南町となりました。中島：稲原や切目というのは、JRの駅名として残っていますね。さきほど小学

校や中学校が4校ずつとおつしやっていたましたが、大体その旧村にあるわけですか。町長：そうですね。真妻と切目川は、児童数が減つてきた関係もあり、平成11年に中学校が1校に、平成21年には小学校も1校になりました。その前は、両地区で小学校は4校ありました。今年、小学校2年と3年は複式になっています。

中島：町全体の人口が減つてきているというよりは、人口が減つている地域があるということでしょうか。町長：そうですね。一方、印南校区生徒数は横ばいか、少し増えています。中島：子どもだけではなく人口の減っている地区は、診療所やお店もなくなり大変ですよね。

町長：はい。山間部の真妻に上洞(かぼら)という地区があり、奥真妻活々倶楽部というお店があります。何をしているかというと、もともとのお店は、ガソリンやお酒・日常雑貨等、言わば村のスーパーマーケットでした。そのお店が閉店

することになり、地域の私たちの生活必需品を買うところがなくなると大変なことになるといふことで、いろいろ皆さんで協議して、国の補助や町の補助を活用して平成26年にお店を借り受け、改修をして再スタートしました。

行政の方から提案したのではなく、住民がみんなで議論して、店番もみんなで行い運営するかたちです。調理室もあり、加工品をつくることもできます。ソファやテーブルもあり、くつろいでおしゃべりすることもできます。売り上げは多くないですが、地域のひとが交代交代で店番をしています。

行政が物をつくり、これを使つてと言つたのでは、長続きしないことも多くあります。大切なことは地域のことを皆さんで話し合い課題を見つけ、そのことに楽しく取り組むことだと思います。奥真妻活々倶楽部の皆さんは本当に元気に楽しくがんばっています。

中島：地方創生の中では小

さな拠点とかいうことで、箱をつくるのはできるのですけど、それを運営してもらう人たちがいなければうまくいかない。町役場として誘いかけみたいなのはあったんですか。

町長：そうですね。行政がまとめた部分はあるんです。ただ、まちおこしには「若者、ばか者、よそ者」が必要であるとよく言われますけど、その中に熱心な人が2人ほどいて、心の底から誰よりも地元のあるべき者で、すぐく人望のあるばか者で地域の人たちから信頼されています。

中島：そうですね。まとめる中心の人たちがいるんですね。また、取材に行きたいと思えます。町長：ぜひ一度行つてみてください。

中島：こうした住民がでてくるのも住みたい、住み続けたいをはじめとして、「実感できる」まちづくりの結果なのかと思います。本日はお忙しいなか、どうもありがとうございます。